

アジェンダ 21 ながの —環境行動計画— 2013



平成 25 (2013) 年 9 月
ながの環境パートナーシップ会議

目 次

はじめに

- 1 アジェンダ 21 ながの 3
 - (1) 「アジェンダ 21 ながの」とは 3
 - (2) 策定・改定の経緯 4

第1章 わたしたちの目指すもの ～長野市の環境ビジョン～

- 1 長野市の環境ビジョン 6
- 2 環境ビジョンを実現するために 7
- 3 ながの環境パートナーシップ会議の10年間の活動と今後の展望 . 10
 - (1) ながの環境パートナーシップ会議の10年間の活動 10
 - (2) ながの環境パートナーシップ会議の今後の展望 38

第2章 理想の街にむけて

- 1 行動計画・数値目標 41

第3章 パートナーシップで進める

- 1 ながの環境パートナーシップ会議の推進体制 48
- 2 進捗管理 50

- 資 料 51

はじめに

1 アジェンダ 21 ながの

(1) アジェンダ21ながのとは

20世紀の科学と技術の進歩は、生産方式の革新と相まって、人間活動を大きく変え、より多くの富を生み出し、人類社会を飛躍的に発展させるものでした。しかしながら、そのような活動は、例えば自然界に存在しなかった化学物質を環境中に排出するなど、必ずしも、環境の利用のコストと環境の復元力に十分配慮した形で行われてきたとは言い難いものでした。

20世紀後半になるに従って、このような人間活動の変化の影響がさまざまな場面に現れてきました。環境問題は、その端的なものです。今日の環境問題には、都市交通公害や湖・湿地帯などの水質悪化のような身近な問題から、オゾン層の破壊、地球温暖化、熱帯林の大規模な開発に伴う生物多様性の減少のような地球規模の問題まで、極めて幅広い問題が含まれますが、それらに共通の原因は、通常の事業活動や日常生活から生ずる環境負荷があまりにも大きなものになっていることです。

自然に恵まれた信州の長野市においても環境問題に無関係ではありません。全国の多くの都市と同様に多数の問題を抱えています。

問題の改善・解決に何が必要なのでしょうか？

もちろん国際的な取り決めや政府による環境対策が必要です。しかし、現実の問題を改善するためには、地域に根差して、地域の人々が対策を立てて実行していくことが必要不可欠です。

1992（平成4）年にリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット（国連環境開発会議）以来、こうした対策を「ローカルアジェンダ」と

呼んでいます。そして現在世界中のたくさんの国と地域でローカルアジェンダの作成が行われています。

長野市においても平成9年に「長野市環境基本条例」が制定され、それに従い「長野市環境基本計画」が平成12年に策定されました。

ここでは長野市の環境施策を総合的かつ計画的に推進して、望ましい環境像の実現を目指しています。そして、その実現のためには、市民・事業者・行政の3者が連携した取り組みが必要不可欠であることから、平成13年6月、3者により「ながの環境パートナーシップ会議」が組織されました。

また、長野のローカルアジェンダを作成することがその結成の目的の一つでした。平成12年から準備を始め、平成13年には本格的に活動を始めました。この会議の特徴はパートナーシップの名が示すように市民・事業者・行政が協働作業を行いながら運営されてきたことにあります。

現在でも、それぞれの立場を理解しながら、協働して活動をしています。

(2) 策定・改定の経緯

「アジェンダ 21 ながの」はこうした経緯を経て長野市版のローカルアジェンダとして平成15年に策定されました。その後、平成19年にはプロジェクトの改定を行いました。

今回、策定から10年余りが経過し、この間、環境に関する諸課題が大きく変化してきていることから、再度の見直しを行うこととし、平成22年に「ながの環境パートナーシップ会議」内にアジェンダ策定のためのプロジェクトチームを組織し、これまで2年以上にわたり協議を重

ねてきました。

平成 15 年の策定からこれまでの 10 年に及ぶ間、法律・制度の改正、環境に関するさまざまな取り組み、「ながの環境パートナーシップ会議」の各プロジェクトの活動などにより、私たちの生活の中に環境に対する意識が深く浸透してきましたが、地球温暖化の深刻化や放射能汚染の発生など、環境問題の様相も変化しています。

こうしたさまざまな状況の変化を踏まえて、あらためて検討を行うとともに「ながの環境パートナーシップ会議」の在り方についても検討を加えて、今回の改定を行いました。